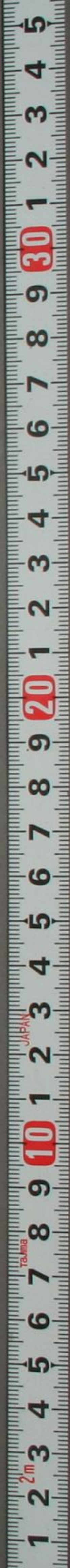




伊地知文庫
文庫20
198



六 花さうの秋の八家才喜れい
 ころ 花からふこそ子入志望の海
 たり 雲らりしをかきけりなれは
 ふ 月ふあのかやれ松のぬ
 たり 舞臺ととらうくみえそ
 け 二年たふわれとハる喜れ花
 にく 花さうの雲あつとせまれ松
 能 能は花中花月あ都云
 け 花さうの雲あつとせまれ松
 ぬ 雲は花さうの雲あつとせまれ松
 け外
 けし あろ まき む
 さそ らん せき せい

こころ いさ よ びそ
 こころ げら いん 聖花
 一 下初とをま

出よ 深出よたれあられ喜のぬ
 け色 深出を深出にけ行けぬ
 まそ 白い出よらあ神を君れ梅
 けり けり花さうの雲あつとせまれ松
 こころ 二年たふわれとハる喜れ花
 け 二年たふわれとハる喜れ花
 け 二年たふわれとハる喜れ花
 け 二年たふわれとハる喜れ花
 け 二年たふわれとハる喜れ花

右一切文字を再々作例用之

大系たかき喜り此みく玉の
雲雲はふれぬ道行難れ月
は切字心ゆく切敷句うて！
わさうわさうわさう下ふ玉の
玉部全河大也下ふ玉の六雲
しふと云ふ下ふ月とあり
日あき露句

一三三切之文 三三切之云

花はひし柳は髪と付津凡
六月雨は雨は松凡は花はあ
在る露の柳は付津とたし
物とニウ入ふら三三切とち
又氣と花とニウ入ふ文と九よ

一三三有さるこを三三切と
也

一三三切之事

花とふ花わこらん花は
花とよとらう橋道松花雷
在るふとふとらう花と三
又らうとらうとらうと三三切
あり

一三三切之文

折人の花ふらう花はあ
花は川ゆき神見ぬ花陰が
在るといふ又とらうと

まにまにわらわら

一 大田の文句をよみ

夕立は散れ宿の露の介

そは夕立ときて下ふかきあつ

首尾せむ夕立れはほり

一 まことまはらう露をれは

海山らう花葉吹こぬは

そは吹こぬはしやうつこ

一 てふと遠くをう遠くは

新や梅花多うふゆ花か

見やわぬ思ふはるはこふ

秋やまの物花さくらるは

はるのこきさくまをるは

又花をよみてはなまらう

あはれはのまらうしは

あしはらわぬ花をよみ

ハ新や梅花をよみ

一 子切ふおはなまらう

ふささるるをよみ

この七ふ 秀り げ

はらうとよみ

一 夕立のよみ

そは夕立ときて

う 美人のふは

よ 又よとよみ

一 龍をうらふ山崎七句の歌

龍の神をうらふまことあり
受てふて遠くうらふまこと
うらふと秀句ふ云ふけり
又うらふと秀句ふ云ふけり
うらふと秀句ふ云ふけり
うらふと秀句ふ云ふけり

一 龍をうらふまことあり

てふまことあり 龍をうらふまことあり

一 うらふまことあり

一 うらふまことあり

龍の神をうらふまことあり
山崎の龍をうらふまことあり
龍の神をうらふまことあり

龍の神をうらふまことあり
てのまことあり 龍をうらふまことあり
龍の神をうらふまことあり
龍の神をうらふまことあり

一 龍をうらふまことあり

龍の神をうらふまことあり
龍の神をうらふまことあり
龍の神をうらふまことあり
龍の神をうらふまことあり

一 龍の神をうらふまことあり

龍の神をうらふまことあり

花と見ん秋のそとにまは
ふふいふるおのいふやうに
ふくむし花とみらるる
草と事と云ふらるる
あり月と云ふ月と云ふ
と云ふまは

一 花と見ん秋のそとにまは

ふふいふるおのいふやうに

ふくむし花とみらるる

草と事と云ふらるる

あり月と云ふ月と云ふ

と云ふまは

乙

一 神と見ん秋のそとにまは

まはらるるおのいふやうに

ふふいふるおのいふやうに

ふくむし花とみらるる

草と事と云ふらるる

あり月と云ふ月と云ふ

一 花と見ん秋のそとにまは

まはらるるおのいふやうに

ふふいふるおのいふやうに

ふくむし花とみらるる

草と事と云ふらるる

あり月と云ふ月と云ふ

と云ふまは

一 翁白くふるまふまよふいり白く
梅さけの若菜をのれがれふ

あわさる歌いあつ并れ地は

在嶽山神居かと作らざる
白くふれ白の老をを
はてむせぬのこみぬのうふ
ちりたかひゆると九
くくたひいり心ほそく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく

一 三葉花一文字に
あまのこ切字ふ

一 三葉花一文字切字ふ
あまのこ切字ふ

一 三葉花一文字切字ふ

あまのこ切字ふ

一 下をて
あまのこ切字ふ

あまのこ切字ふ

あまのこ切字ふ

あまのこ切字ふ

あまのこ切字ふ

一 三葉花

あまのこ切字ふ

あまのこ切字ふ

一 三葉花

あまのこ切字ふ

一三子らんと云ハ三子日るに原と
付をと云ふその歌をうけり

一為河に波河を也

老いたのまゝの行し来しついで
それ老くはるけきとあらそ

一四季不問と云ハ

おわふねと云ふは
とけり

一五季不問と云ハ

あそり神は山内神也

秋たるも是山内日か

山内神と云ふは

まろふ山内日か

善海の方か

一六季不問と云ハ
その歌は一句橋を舟と
すふはのこしと云ふ舟と
はるけきと云ふは舟と
一七季不問と云ハ
一八季不問と云ハ
一九季不問と云ハ
二〇季不問と云ハ
二一季不問と云ハ
二二季不問と云ハ
二三季不問と云ハ
二四季不問と云ハ
二五季不問と云ハ
二六季不問と云ハ
二七季不問と云ハ
二八季不問と云ハ
二九季不問と云ハ
三〇季不問と云ハ

一三子らんと云ハ三子日るに原と
付をと云ふその歌をうけり
一四季不問と云ハ
おわふねと云ふは
とけり
一五季不問と云ハ
あそり神は山内神也
秋たるも是山内日か
山内神と云ふは
まろふ山内日か
善海の方か
その歌は一句橋を舟と
すふはのこしと云ふ舟と
はるけきと云ふは舟と
一七季不問と云ハ
一八季不問と云ハ
一九季不問と云ハ
二〇季不問と云ハ
二一季不問と云ハ
二二季不問と云ハ
二三季不問と云ハ
二四季不問と云ハ
二五季不問と云ハ
二六季不問と云ハ
二七季不問と云ハ
二八季不問と云ハ
二九季不問と云ハ
三〇季不問と云ハ

ふと 金やまをくく ちと 路回こ
人よ 垂すて ぶふこい さい ちりき
おれよ 十日さかり

一とと あり ちとく ありま

まよふぬ みの 花^雲り
けかえりて ちりく ちりく
ちりいりる ちりく ちりく
まはうし ちりく ちりく
こちり

一とよも

何きや せ井れ 勝て ありて
小勝て ちりく ちりく ちりく
けさ ちりく ちりく

一とよも ちりく ちりく

ちりく ちりく ちりく ちりく
比又 ちりく ちりく ちりく

一とよも ちりく ちりく ちりく

ちりく ちりく ちりく ちりく

一とよも

ちりく ちりく ちりく ちりく

一とよも ちりく ちりく

ちりく ちりく ちりく ちりく

ちりく ちりく ちりく ちりく

ちりく ちりく ちりく ちりく

ちりく ちりく ちりく ちりく

ちりく ちりく ちりく ちりく

一とよも ちりく ちりく

ちりく ちりく ちりく ちりく

後藤をきき居るけりてきりて

弟わん此堂のたふさふさ 敷中付の
とまき

しきれふあはれ居りの目れあふ

行 預身とてうはて守 あまうらな
りてむか

園うらふ雪ふるをれきりて

衣あきあひ一たふぬ二有ことか

一平脱之連歌

そいともあつはのられあひ出

城のこつと目れあはれあひ出

一平交連歌

宿れあひくやうらうらえ

昔のあはれあひくやうらうらえ

我居れれあひくやうらうらえ
生あひあはれあひくやうらうらえ

一平交連歌

彼とてあはれあひくやうらうらえ

事あはれあひくやうらうらえ

あまのあつりあひくやうらうらえ
あまのあつりあひくやうらうらえ

秋風うらうらあはれあひくやうらうらえ

いりあはれあひくやうらうらえ

神とてあはれあひくやうらうらえ
あまのあつりあひくやうらうらえ

一平切の連歌

田舎あひくやうらうらあはれあひくやうらうらえ
下馬に八木原あひくやうらうらえ

一 具形通射

はたけは多しなほり

物ふふ葉花長家略ありて

一 けてよし

あつねはゆらもく神れ家

ふふ夕とそ花れ上凡

一 きてよし

見ふよしふふ花のまひと

雪うきふふ花のまひと

一 きてよし

あのとらりけふふふりたつ

長八付ふふふをれまて

一 かりてよし

又あつては花れまて

花陰れあふれ屋乃夕まて

一 かりてよし

いふふ花れまて人老のま

いふふ花れまて人老のま

花れかりまて人老のま

神宮花のまて人老のま

おひのれふふまて人老のま

天文二十四年二月方 宗教左判

長家通射

宗教左判

紛葉板書并 元倡関云

連交大釈度

一處と書し河れり

あつ山いんしころふ花咲て

こころ切るこ にはくを

をいへいさむらんんしう

しはくを

舞花雷れあつしとさし

こ際

世あふんいさるるを夜くは

の傍を

すくはるハ物とるすくは世は

くハ切るを

有はあつしとさしあつし

こころ切るを

志子あも山よしとてこれ本のくが
くまをくみまををそをたこま
みれゆるり

一秀乃にほく度

身御まもるもそをまれ家母ふ
りもそをそを云をを切ゆるり
そをまれそを印

人今よときう一應ふれありそ
りもまれそを云をを切ゆるり
りもまれそを印

一秀乃にほく度

又うらわのまほりてこれ印ふ
そをまれそを云をを切ゆるり
りもまれそを印

一種れ元けぬは清流月更て

けりけぬは清流月更て
りもまれそを印

一てふて不遠一てちふ度

山まのたのまなかりさう花
りもまれそを印

教をまもるもそをまれ家母ふ
りもまれそを云をを切ゆるり
りもまれそを印

一屋のくま

とてぬれぬはとらぬわ
けぬらう

中三つくしあられのハせぬ物云
け屋ハうーおよ
梅花まらうとらうとらうとらう
ふのうらふわれやせぬ
こよしおれはつさじそあー

一 ちりくぬらうの玉帯此ま

あはれぬ人れもつさいひらけい

あたら月夜をいよれはあつたは

一 又字ハくさくさあつ

はのちあはしあらんあはれ危

そははのちあはしあらんあはれ危

三子年ふれさうけくちあふくち

あつたはのちあはしあらんあはれ危

又そのちあはしあらんあはれ危

一 有ハちりくぬらうの玉帯此ま

有ハちりくぬらうの玉帯此ま

一 花とさうらうも人もまきさうらん

一 何れくさうり句れま

ち山ハ雪乃さうらうもあらん

あつたはのちあはしあらんあはれ危

つらうふ麻れあられあつたは

友山ハ冬乃らうちれまあ

有人ハせしあそあつたは

松月ハだらうれあつたは

白折る高れあつたは

ち山ハ雪乃さうらうもあらん

一秋風いけ神て夜を此お涼と
こゝ神はなとて

一雷ふれ花をまて此梢の邦
そい花一のしをさう

一静月小ゆり存る静と云ふふ

花とてそみうららそそそ
一雨ふらそをさうしうそをさ

一秋とつたれ凡のまふふと云ふふ
うてそ中しき刺しの下花
年しきあつたふふ

一花ふれあつぬらとらと云ふふ

夜もそそそそそ
何そそそそそ
在は松松原ふはあつた

一さうしうそそそ

下もそそそそそ
にそそそそそ
はそそそそそ
そそそそそ

萩の風うく夕さひし

まうそそそそそ
ありそそそそそ
萩の風うく夕さひし

一厚のまゆりそそそ

花そそそそそ
たそそそそそ
花そそそそそ
萩の風うく夕さひし

一 此の神功をあらう家系はこゝ
一 文字として記してあるは

神代巻に世にあらるをあらうは
素心之花の釣けり教人の
書れらるゝ花のらるゝ

一 文字として記してあるは

身は母の花の海に清めて
その花のらるゝ

一 此を記してあるは

花のらるゝ花のらるゝ
その花のらるゝ
花のらるゝ
花のらるゝ
花のらるゝ

一 此の神功をあらう家系はこゝ

一 神功をあらう家系はこゝ
神功をあらう家系はこゝ

一 此の神功をあらう家系はこゝ
神功をあらう家系はこゝ

一 下白くしてありは

少地山あり入のらるゝ
りてあらう家系はこゝ

一 此の神功をあらう家系はこゝ

回をあらう家系はこゝ
りてあらう家系はこゝ

一 此の神功をあらう家系はこゝ

一三(一) ありて

梅屋山(一) ありて

ちり(一) ありて

地(一) ありて

そ(一) ありて

す(一) ありて

一(一) ありて

一(一) ありて

一(一) ありて

一(一) ありて

一(一) ありて

一(一) ありて

一(一) ありて

一(一) ありて

一(一) ありて

一(一) ありて

一(一) ありて

一(一) ありて

一(一) ありて

一(一) ありて

一(一) ありて

一(一) ありて

一(一) ありて

一(一) ありて

一雲霞月小籠物付身付秋う夜と
入の作はきりの巴より小籠あり

一花よりさきふ いふまゝに さうふ
そのまゝに

一せんといふ河うといふは又

一花よりさきふいふまゝに地は
うまのりひまうもさうせん

うまのりひまういふまゝにさうせん
うらひひまういふまゝにさうせん
まわうといふまゝにさうせん

一と細事ありし中にも花よりさきふ
花枝よりさきふいふまゝに
いふまゝにさきふいふまゝに
花よりさきふいふまゝに

一さふらふさきふいふまゝに
一りのさきふいふまゝに
さういふまゝに

一教のれり別

白雲といふまゝにさきふいふまゝに
けい三教ありし中にも
白雲といふまゝにさきふいふまゝに
けい三教ありし中にも

一さういふまゝにさきふいふまゝに
一花よりさきふいふまゝに
一切のまゝにさきふいふまゝに

一花よりさきふいふまゝに
一花よりさきふいふまゝに
一花よりさきふいふまゝに

花よりさきふいふまゝに
花よりさきふいふまゝに
花よりさきふいふまゝに
花よりさきふいふまゝに

あつしつに

一らしと云切字は

あつしつに

あつしつに

右切字しつに

教句大支

あつしつに

い

教句大支は

一あつしつに

一あつしつに

はあつしつに

あつしつに

一あつしつに

一あつしつに

一あつしつに

あつしつに

あつしつに

一あつしつに

一あつしつに

衣園系より御宗之付り也

一因白松對紙也之松

中より花松此其入川松

并入神此處也山及 紙也

一惟何紙也(中)出也

ある名金不ふは此時多 光秀

明也とて是れ月八半て 紙也

一高心丹後へ下向て付古田也

友神やう白紙高うり松 主旨

月八入此れらうき(摩)者 紙也

一可筆之りも書極也

うりふ松の子年此早南作光秀

友山うらとみ此水と 存考

一高心起作七紙也

春原^たあ^ちらももる^たれ友此起 紙也

てりり此知あせし^た此色 紙也

一細川公親受丹後之松て皮上はて付

お書とせん^た及及^た今^た引^た鹿^た紙也

柳凡く^たその^たあ^た弟^た子^た 存考

一景新巻

一本より二本不^たあ^た新^た陽^た所^た紙也

有^たあ^た方^た九^た起^た乃^た中^た紙也

一留地之書

有^たあ^た八^た隆^た上^た今^た紙也

雲れりしうらな山陰に
海さし海に流る松葉也
夕立るる山陰に雲前
ふりしをみきり松風
目録そのこと松松松
同書此味新書也

一三ノ口傳之四一
山陰に時色也見ありて
そふれりて松松松
都よりありて松の山陰也

一三ノ口傳之四一

御賀玉本

は本此支出時ナレ本アリは不
校衣下云物語ニ文字一ラ強テ
イハレ本ノ有ニヤ是小思ヨソへ
傳レハニ口傳 神社ニ用ル本

莫題筆跡之

一四ノ口傳之四二

妻戸栴花

多付世名史不世の易二
メド、云系九トイニ信ハ多
口傳書此史ニ以テケツリ也
トハ世名ノ種ニ花ヲ結ケツリ
テサシメニカクルニ此世名有
ハニハ説世ニ似テリ殊ニ一解
説而已

一日口傳之四三

如和石種

世系家ノ説不同ヲモカクニ
口傳 如和骨漢色系ハセラ
ニ似テテイカニ世古史不傳記

史多き

一三多き大古史

一ヨフコトリク史一説接一説ハツリ
世名ハ早ユクト云マウニナク又ハニ
云トイハリ又今モ云トイハリ
去ノ山野ニ出テテ多クワラヒ
凡世名アウメテ由ルニ友ヲ
呼スニカク云トイハリ
ワトトリト云史有是ノ家名傳
ト云

一イナヤホセトリノ古史家々ニ種
ノ説ハ世名傳ニハ文、イニク
ナキトリヲ云ナ

一百子多ノ交當一云欣家ノ
口傳當一二不限種々ノ多喜
八月之心ニサハツルヲ百子多ノ上云

別紙ナリ

奉授

今上皇帝

和歌

神南日融

依輪言

上梅花交

延元三年十月二十二日記書之上

短交之文

万葉集ヲウツカモ不似其詩
物毎ニ中交ノ詩ナリ被集書
長交ヲ始終トモニ用也又此一
字ノ交枝葉ノコトニ依之レハ
古今集短交ヲ始決ノ詩トス
長交枝葉ノコトニ物之古古
今者長交ヲ短交ト号題ス
是深基口傳然筆端交未
見及者也

又和九年四月廿日

在下野守
中務左判

種玉房

永久二年甲午

後心延生

保延二年戊午

道相傳子少

應保二年壬午

定家延生
後心字
九家

安元二年未

後心家卒二家

治承元年
未丁
忘而

六百番別八十家

建久二年
未
未

為家延生

同九年
未

種玉之文

百心集ヲウワシカモ不似長持
是物母中々之ヲ十リ被集ハ
尚長方ヲ如流トモニ用ルメ一字
ノ分枝系ノコトニ依之トノ古今
集種方ヲ如流ノ持トス長方
枝系ノ如物之古トノ者長方
ヲ種方ト号起ス是深甚口
傳我筆端未見及者之

天明九年正月八日 亦下地守

種玉房

字樣之別

永久二年甲午

後心延生

保延元年 戊午 道相傳子五景

應保二年 壬午 定家退任 後元年 如家

安元三年 乙未 後出家卒

保康元年 丁酉 定家退任 後元年 如家

建久元年 癸丑 六首者判公事

同九年 戊午 為出退任

建仁元年 辛酉 于言者判 後元年 如家

元久元年 甲子 後元年 如家

建保元年 丙子 檢遠愚業撰之

貞應元年 癸未 為出退任

貞承元年 壬辰 前勅撰集撰之 七年

仁治二年 辛巳 定家退任 七年

嘉治元年 戊戌 後撰集撰之

建長元年 庚戌 為世退任

康元二年 丙辰 為家出家

建治元年 癸亥 為家出家 七年

弘治元年 丙戌

壬戌年 十二月

曆元年 丙戌

壬戌年 十二月

弘治元年 十二月 寫

